

牛深町砂月湾におけるアマモ増殖の取り組み

浅海干潟研究部 高日 新也

藻場は、「海のゆりかご」とも呼ばれ、魚介類の産卵場所や仔魚の生育場所として重要な役割を果たしています。熊本県海域におけるアマモ場は、以前に比べて減少しており、アマモ場再生に向けての取り組みが県内各地で行われているところです。

今年度当センターでは、天草漁協青壮年部と共同して、天草市牛深町砂月湾の水深5m程度のところに、アマモ苗の移植試験を実施していますので、今年度の経過について報告します。

アマモ苗の移植方法については、ロープに苗を結わえて船から海中に沈める方法や、長方形のマットに苗を敷き、マットごと砂の中に埋める方法など、色々な方法がありますが、今回は、生分解性の園芸用ポットに肥料と砂を敷いて、苗を1株ずつポットに植え込み、ポットごと砂の中に埋める「ポット法」で移植を行いました。移植した苗は、牛深白瀬で採集した種子を当センターにて育てたものです。移植の際には、苗の地下茎（砂の中で体を固定し、根っこの役割を果たす部分）同士がしっかりと絡まり合うように、ポット同士が卵パック状に連結したものを使って、苗と苗の距離が近くなるような工夫をしました。

平成24年5月に移植を行い、その1ヶ月後に苗の状況を確認したところ、苗は海中でその葉を伸ばし、順調に生育している様子が確認されました。潜水器具を使って詳しく観察を行ったところ、アミメハギの幼魚が隠れている様子や、イカの卵が付着している様子も確認されました。

8月の終わりに、西の海上を台風が通過し、この海域は大時化に見舞われました。移植した苗が流されていることが心配されましたが、9月に行われた調査では、苗は砂の中にしっかりと根を張り、一部は新芽の発芽も見られました。

秋になって葉が枯れ落ち、アマモの姿は砂の上からは見えにくくなってしまいましたが、来年の春には再び葉が伸び、稚魚たちの生育の場所として役立つていくことでしょう。



観察されたアミメハギの幼魚



台風後に観察された新芽